

樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4596

樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(3)

白 川 哲 郎

はじめに

本稿は、本国国文学科の直接の前身となる、樟蔭女子専門学校(以下、「樟蔭女専」と記す)国文科で実施された、昭和一五(一九四〇)年度から昭和一九(一九四四)年度の中等教員免許「国語」に関わる試験問題を翻刻、紹介するものである。

翻刻・紹介する試験問題は、昭和四(一九二九)年五月、樟蔭女専に対して認められた中等教員免許無試験取り扱いに基づき、免許の申請を行うに際して文部省へ提出された各年度の試験問題の控えを綴った『検定三関スル試験問題集』(樟蔭学園所蔵)に載せられているものである。⁽¹⁾筆者はこれまでも本誌において、昭和三(一九二八)年度から昭和二三(一九二八)年度までの「国語」「文学史」の試験問題を紹介し(以下、「翻刻1」と記す)、⁽²⁾さらに、昭和二〇(一九四五)年度から、樟蔭女専最後の年度となる昭和二三(一九四八)年度までの「国語」教員免許関係の試験問題について

も紹介してきた(以下、「翻刻2」と記す)。⁽³⁾今回の翻刻と紹介は、その翻刻1と翻刻2との間を埋める作業となる。

一、試験問題の翻刻

昭和一五年度から昭和一九年度までの中等教員「国語」免許に関わって、各年度末に樟蔭女専国文科において実施された試験問題を翻刻、整理したものが、別掲の表「樟蔭女子専門学校国文科「国語」検定試験問題(昭和一五(一九四〇)年度～昭和一九(一九四四)年度)」(以下、「表」と記す)である。

本稿でも、翻刻2に準じて、中等教員「国語」免許に関わる科目全般の試験問題を取り上げた。したがって表には、「国語」以外の「倫理」等の科目も載せている。また、「漢文」についても翻刻2と同様に、出題されている作品(文章)のレベルから取り上げた。これにより翻刻2と併せて、昭和一五年度以降の「漢文」試験問題を

概観することができる。なお、残る翻刻1の時期に当たる昭和一三年度以前の「漢文」試験問題については、次の機会を期したい。

二、昭和一五・一九年度「国語」試験問題についての若干の考察

それでは、翻刻・紹介したこの間の「国語」試験問題について、注目点を確認して行くことにしよう。

まず、新町徳之先生が担当されている「文学概論」「国語学」について見よう。「文学概論」においては、文学の本質(17)、以下同様に出題年度を()内にアラビア数字で示す)・文学の発生(18)や鑑賞と批評(15)・創作と批評(18)といった、理論的問題が出題されている。文芸と道徳との関係(15)が問われたり、悲劇(16)が取り上げられているのも同様の傾向と言えるよう。

一方、「国語学」では、鎌倉室町時代語(16)や古代語と近代語(17)といった、時代毎の日本語(国語)の特徴が取り上げられており、「国語学」においても理論的な問題が出題されていると言えるよう。しかしながら、本居宣長(15・16・18)を中心に、新井白石(15)や束條義門(17)と、いわゆる国学系の学者が必ず取り上げられており、「国語学」の柱が国学に置かれていたこともはっきりと読み取れよう。また、昭和一六年度以降、世界言語における日本語の地位(16)や大東亜共栄圏における国語の地位(18)といった点が問われており、その背景として、当時の日本によるアジア・太

平洋地域への侵略戦争の展開を考える必要があることについては、かつて述べた通りである。⁽⁴⁾

次に、「国語」試験問題のうち、いわゆる講読の対象として取り上げられている作品や作者について見てみよう。『古事記』が毎年、『源氏物語』が昭和一五年度を除く毎年、それぞれ取り上げられていることが大きな特徴である。また、山口助治先生による『万葉集』の出題(15・17・18)、さらに、出題者は変わるが井原西鶴の『日本永代蔵』(15・16)が出題の対象とされる作品として確認される。このように見てくると、『古事記』『万葉集』『源氏物語』『日本永代蔵』の四書を、出題対象作品の“定番”としてあげることができよう。加えて、出題教員と取り上げられる作品は年度によって異なるが、謡曲も出題分野として同様に“定番”となっていることを確認しておかなければならないであろう。⁽⁵⁾

「文学史」に関しては、正岡子規(15・17・18)・幸田露伴(15・16)・坪内逍遙と『小説神髓』(17・18)、そして近代詩の分野(17・18)が出題されていることが確認される。この時期の樟蔭女専の「文学史」においては、明治期の小説・短歌・詩がもっぱら取り上げられ、教授されていたことが知られよう。

最後に、「漢文」についても見ておこう。この間、「漢文」は全て大江文城先生が担当されている。出題されているのは、『老子』(15・16・18)『莊子』(15)『孟子』(15・17)『荀子』(15・16・17)『韓非子』(15・16)『春秋伝』(18)『詩経』(18)『書経』(18)に孔子(15・16)といった、いわゆる中国の古典である。

そうした出題傾向の中にあつてとりわけ目を引くのが、昭和一九年度の頼山陽『日本外史』からの出題である。日本の漢文が取り上げられていること自体極めて異例のことであるが、そこで取り上げられた作品は、幕末維新期に非常に流行し、当時の尊皇攘夷運動に大きな影響を及ぼした『日本外史』であつた。^⑥『日本外史』はまた、「内包する儒家的名分論が、第二次世界大戦以前の右傾勢力に利用されたこと」^⑦でも知られている。昭和一九年度は、勤労動員により授業日数そのものが極めて少なく、しかも繰り上げ卒業により九月に試験が実施されていたことを踏まえるならば、「漢文」の授業についても十分に実施されていたとは考え難い。そうした状況の下で出題された作品が、従来の中国の古典ではなく、『日本外史』であつたのである。当時の授業内容等についてさらに追究した上で判断すべきことではあるが、先のような性格の『日本外史』が取り上げられるに至つたのは、昭和一九年という太平洋戦争末期の社会状況が反映しているのではないかと考えられる点を、ひとまず指摘しておきたい。

三、「国語」試験問題出題内容の推移と特色

以上、昭和一五〜一九年度の中等教員「国語」免許に関わる試験問題について見てきた。今回、当該期のそれを翻刻、紹介したことによって、樟蔭女専国文科において第三学年学年度末に実施された「国語」関係の試験問題を、ほぼ紹介し終えたことになる。^⑧そこで

改めて、試験問題に出題された文学作品や作者、事項について整理し直してみた。それが後掲の表「樟蔭女子専門学校 国文科「国語」試験問題 出題内容」である（以下、「内容表」と記す）。なお、内容表に整理したのは、昭和三年度樟蔭女専「教授要目」以下、「教授要目」と記す）に掲載されている国文科第三学年教授時間配当表^⑨中、「国語」一五時間に含まれる「講読」（一〇時間）・「言語学」（一時間）・「文学史」（三時間）・「文学概論」（一時間）に該当すると見なしうる試験問題についてである。「漢文」に関しては、昭和一三年度以前の試験問題の翻刻を終了することができていないことから、今回は見送り、別の機会を期したい。それでは、内容表に基づいて出題された文学作品や作者、事項について概観して行こう。

内容表からはまず、昭和一二・一五年度を除き樟蔭女専一期生が卒業した年度から最後の年度まで、主には上原延蔵先生によって『源氏物語』が出題され続けていることが判る。樟蔭国文の、言うならば「源氏の伝統」を見いだすことができようか。次に、新町徳之先生、田井嘉藤次先生、山口助次先生、小林文助先生と出題する教員は変わるが、昭和一〇年度を除き、昭和四年度から昭和二二年度まで『古事記』の出題が続いていることも確認しておかなければならないであろう。加えて、山口先生の在任中には、昭和一〇・一三・一六年度の三回を除き、『万葉集』が出題されており、山口先生が退かれた後も、昭和二〇・二一年度と『万葉集』が取り上げられていることも確認される。

このように第二次世界大戦の敗戦直後の段階まで、『源氏物語』『古事記』『万葉集』が、樟蔭女専第三学年の「国語」教育における講読の対象となる文学作品の中核であったことを再確認することができる。これは、『教授要目』に示されている、樟蔭女専が開学当初から第三学年の「国語」教育の柱とした文学作品と合致していることについては、以前にも指摘したことがある。⁽¹³⁾『教授要目』には、右の三作品と並べて井原西鶴と近松門左衛門の作品を取り上げることも明記されているが、これら近世文学については、新町先生が昭和四年度から西鶴の作品を断続的に取り上げ、それ以外に上原先生が近松の作品を一回、その後、小林・細川馨両先生が西鶴の『日本永代蔵』を昭和一六年度まで取り上げられている。ただ先の三作品に比べるとその取り上げられ方は少ないと言える。

また、『教授要目』でそれらとともに柱として掲げられている「明治大正ノ文学」⁽¹⁴⁾は、基本的に講読としてではなく、「文学史」の問題として扱われている。この点については、既に触れたことがある。⁽¹⁵⁾内容表にも明らかのように、昭和六年度までは近世文学関係の出題も見られなくはないが、それ以降においては、幸田露伴・正岡子規・坪内逍遙『小説神髓』、そして近代詩関連と、明治期以降の作品や作家、事項のみが出題されている。そうした中であって、菊池寛・芥川龍之介という、当時としては「同時代」と見なすべき作家を取り上げた昭和一二年度の武田宗俊先生の問題は、やはり注目されるべきであろう。⁽¹⁶⁾

一方、『教授要目』の記載内容との相違として目を引くのは、昭和

和一〇年度以降、たびたび取り上げられ、昭和一二年度には科目としても立てられている謡曲の扱いである。昭和一一年度、武田先生が『大原御幸』や世阿弥の作品を取り上げて以降、出題者は細川・山口・上原先生、そして勝俣億朗先生と変わるが、世阿弥と世阿弥の『高砂』を中心に繰り返し取り上げられていることは前述の通りである。⁽¹⁷⁾『教授要目』の中で謡曲は第二学年の配当となっていたことからすると、第三学年へ配当学年が変更されたものかとも推測される。ただ、これも既に指摘したことであるが、わずか一回限りとは言うものの、「謡曲」という科目が設けられていることには、やはり注意しておきたい。⁽¹⁸⁾

次に「言語学」および「国語学」に目を移すと、その出題は、母音（5・12）や子音（5）、促音（7）、外来語（7・9）、アクセント（15）など、基本、国語に日本語に関わるものと言える。⁽¹⁹⁾「言語学」が科目名とされていた段階では、文字や内的言語（3）など、国語に限定されない問題が出題されることもあったが、昭和六年度に科目名が「国語学」とされて以降は、本居宣長に代表される国語系の国語研究に関わる出題（10・12・15・18・20）が多くなることは前項でも触れたが、内容表でいっそう明らかとなる。昭和一一・一八年度における日本語・国語の世界的な地位についての出題も、同様に前項で触れた。ところが、第一次世界大戦敗戦後には、そうした傾向の問題が出題されなくなっている。やはりそこには、戦争の影響を見いださざるを得ないであろう。

戦争の影響という点に関して言えば、昭和一二年度「文学概論」

における「愛国行進曲」を鑑賞させるという出題は、その異例さがやはり際立っている。「文学概論」という科目においては、小説と戯曲(5)、批評(7・9・13・15・17・18・20)、文学・小説の本質(7・12・17)や悲劇(8・9・16・21・23)等々、文字通り、概念的、あるいは理論的なことがらを問う出題がほとんどで、個別の作品を出題対象とすることは、最初の昭和三年度を除いて確認できない。そうした科目において、個別の作品が取り上げられたこと、それ自体の異例さをまず確認したい。加えて、再論することは差し控えるが、「国民精神総動員運動」の方針に基づいて作歌された、国威発揚の内容に満ちた「愛国行進曲」が鑑賞の対象とされていることは、やはり異例の出題と言うしかないであろう。日中戦争が勃発し、日本が戦争へと傾斜を強めて行く昭和十二年、その時期を象徴する出題であり、学校現場における戦時体制の浸透と強化を如実に示す事例と言いうことができる⁽¹⁹⁾。

むずびにかえて

樟蔭女専『検定ニ関スル試験問題集』に残る国文科関係の「国語」試験問題を二〇〇八年に初めて本誌に翻刻、紹介して以来、ようやくその全体をほぼ紹介し終えるところまでたどり着いた。そして今回、内容表という形で出題された文学作品や作者、事項を整理し直した結果、改めてその特徴についても確認し直すことができたと思われる。

もちろん、樟蔭女専の「国語」教育の全容に迫るには、積み残しとなっている昭和一二年度以前の「漢文」試験問題についての紹介を早急に果たさなければならない。また、『検定ニ関スル試験問題集』に即して言えば、「国語」の試験が課されたのは、当然、国文科だけではない。他学科においても「国語」の試験は課されていたのであって、樟蔭女専の「国語」教育というより大きな見方をするならば、それらについても検討を進める必要があることは繰り返すまでもない。さらに言えば、『検定ニ関スル試験問題集』に載せられているのは、第三学年を対象とした試験問題のみであり、第一・二学年に対しての「国語」教育については、そこから直接的に明らかにすることはできない。別のルートからの検討が必要とされている。また、武田宗俊先生の事例などを念頭に置けば、これまでの検討からもう一步踏み込んで、試験問題と出題者、すなわち教員との関係についての検討も、次なる課題として浮かび上がってきたように思われる。教員の経歴なども踏まえて、試験問題で取り上げられている文学作品や作家、事項などについて検討し直すことが求められていよう。

残された課題は多い。遅々たる歩みではあるが、これらの課題を果たすべく、今後の作業に努めて行きたいと思う。

〔付記〕 本稿は、二〇〇三～二〇一二年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費による成果の一部である。

- (1) 拙稿「十五年戦争期の女子専門学校国語試験問題」(『大阪樟蔭女子大学論集』第四六号、二〇〇九年、以下「拙稿09」と略記する) 参照。
- (2) 白川・本間悦江・宮本愛美・吉田みなみ「樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(1)」(『樟蔭国文学』第四七号、二〇一〇年)。
- (3) 拙稿「樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(2)」(『樟蔭国文学』第五〇号、二〇一三年)。
- (4) 拙稿09六ページ。
- (5) ただし、今回対象とした五年間で三回と、世阿弥の『高砂』が出題される確率が高いことは確認できる。
- (6) 『日本歴史大事典』第三巻(小学館、二〇〇一年)「日本外史」の項目など参照。
- (7) 『国史大辞典』第十一卷(吉川弘文館、一九九〇年)「日本外史」の項目。
- (8) 拙稿「教務日誌に見る昭和一九年度の樟蔭女子専門学校」(『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第二巻、二〇一二年) 九〇～九二ページ参照。
- (9) 拙稿09・翻刻1・翻刻2、および拙稿「昭和初期の樟蔭女子専門学校国文科―昭和三年の『教授要目』と『検定ニ関スル

試験問題集』から」(『樟蔭国文学』第四五号、二〇〇八年、以下、「拙稿08」と略記する) 参照。

- (10) 拙稿08三二ページ参照。
- (11) 翻刻1六一～六二二ページ。
- (12) 拙稿08三二ページ参照。
- (13) 拙稿08三二ページ参照。
- (14) 拙稿09四ページ、ならびに翻刻1六一二ページ。
- (15) 翻刻1六三ページ。
- (16) 拙稿08三一ページ。
- (17) 翻刻2二五ページ。
- (18) 拙稿09五ページ。
- (19) 拙稿「昭和一二年度の樟蔭学園―樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用(7)―」(『大阪樟蔭女子大学論集』第四五号、二〇〇八年) 参照。

「国語」試験問題 出題内容③

文学概論	文学史	国語・国文		国語・国文
新町徳之	細川馨	小林文助		
創作と批評	矢野龍溪『経国美談』・政治小説	『古事記』上巻 「天の岩屋」※		
文学概論	尾崎紅葉と幸田露伴	『古事記』中巻 応神天皇		中村福次郎
安田章生				シェリー「雲雀の詩」「雪の詩」・キーツ「夜鶯の詩」
喜劇	勝俣億朗		井原西鶴『口本永代蔵』二 代目に破る扇 の風 ※	
詩・戯曲・小説の特質	謡曲／犬王と観阿弥			
喜劇精神と悲劇精神		清少納言『枕 草子』	松尾芭蕉『奥 の細道』	
詩精神と散文精神				

表 樟蔭女子専門学校 国文科

年度		国語・国文			国語学	
昭和20	1945	山口助治		上原延蔵		細川馨
				『源氏物語』 須磨	『万葉集』※	本居宣長
昭和21	1946	勝俣億朗		・『源氏物語』 梅枝・幻		国語学（概説）
		『万葉集』	謡曲・世阿弥・神舞物			安田章生
昭和22	1947	清少納言『枕草子』	『古今和歌集』	勝俣億朗 『源氏物語』 桐壺	安田章生 柿本人麻呂	仮名文字 文字の起源
昭和23	1948	謡曲		宇佐美喜三八	西行と藤原定家	日本の文学
		勝俣億朗		『源氏物語』明石		
		謡曲 観阿弥作・世阿弥改『松風』 大小の序の舞・太鼓の序の舞				

注記1）※印は、語句の説明等、関連する内容を含む場合を示す。

2）昭和11（1936）年度と昭和14（1939）年度については、対象となる生徒（卒業年次生）がいないため、試験が実施されていない。

「国語」試験問題 出題内容②

文学概論	文学史	国語・国文	
新町徳之	徳山健三	新町徳之	武田宗俊
	河竹黙阿弥／明治期の戯作 高山樗牛／明治中期の浪漫主義 明治中期の詩壇	横井也有『鶉衣』衆魚賦 『猿蓑』向井去来・野沢凡兆・松尾芭蕉 『誹風柳多留』	謡曲『大原御幸』 謡曲 世阿弥『砧』 謡曲 観阿弥作・世阿弥改『松風』
小説の本質 「愛国行進曲」の鑑賞	武田宗俊 尾崎紅葉と幸田露伴 島崎藤村の小説 若山牧水・河東碧梧桐・長塚節・坪内逍遙・斎藤緑水・福地桜痴		戯曲：菊池寛『父帰る』・山本有三『海彦山彦』・岸田国士『紙風船』 『堤中納言物語』花桜折る中将
写実小説の特色 鑑賞批評	夏目漱石 菊池寛・芥川龍之介	『紫式部日記』 『猿蓑』松尾芭蕉・向井去来／与謝蕪村『あけ鳥』／小林一茶『おらが春』 『誹風柳多留』井上剣花坊	芥川龍之介『或日の大石内蔵助』
文芸と道德 文学概論の体系 鑑賞と批評	細川馨 正岡子規 高山樗牛 幸田露伴	小林文助 『古事記』中巻 神武天皇東征 井原西鶴『日本永代蔵』二代目に破る扇の風	細川馨 謡曲と狂言 謡曲『鉢木』
音位律 悲劇	尾崎紅葉 幸田露伴	『古事記』上巻 邇邇芸命天孫降臨／中巻 倭建命	井原西鶴『日本永代蔵』煎じやう常とはかはる問葉※
文学の本質 文芸批評	新体詩 正岡子規 坪内逍遙『小説神髓』	『古事記』上巻 葦原中国の平定 大国主神の国譲り・邇邇芸命 天孫降臨	謡曲 世阿弥『高砂』
文学の発生 創作と批評	矢野龍溪『経国美談』・政治小説 近代詩 落合直文 正岡子規 坪内逍遙『小説神髓』	『古事記』上巻 葦原中国の平定 大国主神の国譲り・中巻 神武天皇 東征 ※	謡曲『熊野』
		『古事記』上巻 天照大神と須佐之男命 天の河の誓約	

表 樟蔭女子専門学校 国文科

年度		国語・国文				国語学
		山口助治		上原延蔵		新町徳之
昭和10	1935		菅原孝標の女『更級日記』	『源氏物語』 橋姫・総角		古代語と近代語 書日解題『篆隸萬象名義』 『手爾派大概抄』『古言梯』 『語学新書』『雅言音声考』 『山口の菜』
昭和12	1937	『万葉集』 巻3・15+巻5以下	『古事記』 下巻 仁徳天皇 ※		近松門左衛門 『曽根崎心中』 『丹波与作侍夜の小室節』 『国性爺合戦』	母音の性質 東條義門 方言の地方的画期
昭和13	1938		『古事記』 下巻 仁徳天皇	『源氏物語』 橋姫・椎本		
昭和15	1940	『万葉集』 巻2・5・9・16			『堤中納言物語』虫めづる 姫君・逢坂越えぬ 権中納言	国語のアクセント 新井白石・本居宣長
昭和16	1941		謡曲 謡曲 世阿弥 『高砂』	『源氏物語』 明石		世界言語における日本語 鎌倉室町時代語 本居宣長
昭和17	1942	『万葉集』 巻2 ※		『源氏物語』 螢・梅枝		母音 古代語と近代語 東條義門
昭和18	1943	『万葉集』 巻1 ※		『源氏物語』 須磨・螢		大東亜共栄圏における国語 本居宣長
昭和19	1944			『源氏物語』 明石	謡曲 世阿弥 『高砂』	

「国語」試験問題 出題内容①

文学概論	文学史		
	青木幹一		
	桂園派の歌風と歌人 滑稽本		
	国語・国文		
	新町徳之		
	徳山健三	御伽草子 談林派俳諧 『草庵集』・金比羅浄瑠璃・小沢蘆庵	井原西鶴『世間胸算用』問屋の寛闊女
新町徳之	田井嘉藤次		
文芸批評の標準／樋口一葉 『たけくらべ』 島崎藤村 『破戒』 幸田露伴『五重塔』 夏目漱石『草枕』 武者小路実篤『その妹』 文学概論の体系 小説と戯曲 舞台効果・叙景詩・曖昧説・ 純粹感情・勸懲主義・思想劇	近世の文学史的時代区分とその情勢・文化の中心地の推移 太田蜀山人・八文字舎本		『古事記』上巻 葦原中国の平定 大国主神の国譲り
	井原西鶴 紀海音 明治期の観念小説		井原西鶴『世間胸算用』長刀はむかしの鞘 ※
文学批評の意義・種類・標準 一芸術品の本質 一作家・学者の文学思想 東洋の一作家と西洋の一作家との比較	幸田露伴 明治中期の社会小説		『古事記』上巻 葦原中国の平定 大国主神の国譲り・火遠理命 火照命の服従／中巻 神武天皇 東征
悲劇の性質 鑑賞批評	与謝野晶子 明治中期の俳壇	『古事記』上巻 天照大神と須佐之男命 須佐之男命の勝さび ※	井原西鶴『世間胸算用』問屋の寛闊女・年の内の餅ばなは詠め
批評と創作 詩歌の韻律 悲劇の形相 本居宣長「物のあはれ」	河竹黙阿弥／明治期の戯作 北村透谷／詩 島崎藤村／詩集	『古事記』上巻 天照大神と須佐之男命／中巻 神武天皇・景行天皇／下巻 雄略天皇	井原西鶴『世間胸算用』つまりての夜市 ※

表 樟蔭女子専門学校 国文科

年度		国語・国文				言語学
昭和3	1928	山口助治		上原延蔵		青木幹一
		『万葉集』巻12・13		『源氏物語』若紫・帚木・桐壺		言語に対する文字の適応性 内的言語 文字の萌芽 諺文
昭和4	1929	『万葉集』巻2・3・4・11～16		『源氏物語』総角・橋姫		文学の変遷 上代における漢字の仮用法 を例とした文字の適応性
昭和5	1930	『万葉集』巻3・4		『源氏物語』橋姫・総角		標準語 国語母音と子音
昭和6	1931	『万葉集』巻11・13		『源氏物語』明石・橋姫		
昭和7	1932	『万葉集』巻13・14・16・19		『源氏物語』須磨・明石		国語学
						徳山健三 国語の促音 外来語
昭和8	1933	『万葉集』巻6・19 大伴家持		『源氏物語』橋姫		音変化の諸現象 藤原定家の仮名遣い
昭和9	1934	『万葉集』巻5・9・16+ 作者未詳歌 収載巻(1・2・7・9～14・16・17)		『源氏物語』橋姫・総角		新町徳之
						ハ行音の性質 外来語の意義 音韻の銘化 男信 雅語音声語 国語学概説の参考書

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和19年度	国語	80	小林 文助	左の文に仮名をつけ且解釈せよ 天照大御神は御髪を解き御美豆羅に纏かして左右の御美豆羅にも御縵にも左右の御手にも各八尺の勾璫の五百津の御須麻流の珠を纏き持たして背平には千入の鞆を負ひ平には五百入の鞆を附け又臂には稜威の高柄を取り佩ばして弓腹振り立てて、堅庭は向股に踏み建びて、待ち問ひたまはく、「何とかも上り来ませる」と問ひたまひき、	『古事記』上巻 天照大神と須佐之男命 天の河の誓約	
	漢文	80	大江 文城	一、左ノ文ニ返点・送仮名ヲツケ且ツ解釈セヨ 余嘗西遊長門、過壇浦、觀平氏覆滅之処矣、又抵肥後、聞其州有王家山、山谷深阻、平氏或鼠匿焉、子孫至今猶有存者、不與外人交通云、夫平氏於王家、功罪相償、天必勦絶其後、則是其或然也、 二、同上（左ノ文ニ返点・送仮名ヲツケ且ツ解釈セヨ） 嗚呼八洲生民、誰不被先王之遺澤、當時所謂武士者忸其饕養、供其使喚、雖名位族望、遠出其右者、奔走驅馳、甘為之役之不暇、氣類所召、習以為常、豈可勝言哉、	頼 山 陽『日本外史』卷之一	
					頼 山 陽『日本外史』卷之五	

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和18年度	国語	80	山口 助 治	一、左ノ長歌ノ評釈 藤原宮之役民作歌 やすみしゝ吾が大君高照らす日の皇子荒 妙の藤原が上にをす国をめし給はむとみ あらかは高しらすと神ながら思はすな べに天地も寄りてあれこそ警走る淡海の 国の衣手の田上の山のまさ木さく檜の爪 手をものゝふの八八十うち川に玉藻なす 浮べ流されそを取るとさわぐ御民も家忘 れ身もたな知らず鴨じもの水に浮きゐて 吾がつくる日の御門に知らぬ国より古瀬 路より吾が国は常世にならむふみ負へる あやしき亀もあたら代と泉の河に持ち越 せる檜の爪手を百足らず浅につくり許す らむいそはく見れば神ながらならし、	『万葉集』 卷之一 雑歌	
				二、万葉集研究書五種を選び其の著者と 書名とを記せ	『万葉集』	
	漢文	80	大江 文 城	一、左ノ文ニ句読点・返点・送仮名ヲ附 ケ且ツ解釈ヲ記セ 里克謂荀息曰君殺正而立不正虜長而立幼 如之何願與子慮之荀息曰君嘗訊臣矣臣對 曰使死者反生生者不愧乎其言則可謂信矣 里克知其不可與謀退弒奚齊荀息卓子里克 弒卓子荀息死之荀息可謂不食其言矣	『春秋伝』 第五 僖 公上	
				二、同上 三十輻共一轂、当其無有車之用、埴埴以 為器、当其無有器之用、鑿戶牖以為室、 当其無有室之用、故有之以為利、無之以 為用、	『老子』 第十一章	
	漢文	80	大江 文 城	一、漢字ノ構成四法ヲトキ且ツ之ガ例各 五字ヲ示セ 二、左ノ詩ニ返点・送仮名ヲツケ且ツ何 ヲウタヒタルモノナルカラ述ベヨ 燕々于飛 差池其羽 之子于歸 遠送于野 瞻望弗及 涕泣如雨	『詩經』 上 邶 風 燕燕	
				三、左ノ文ニ返点・送仮名ヲツケ且ツ略 解セヨ 予視天下愚夫愚婦、一能勝予、一人三失 怨豈在明、不見是図	『書經』 夏書 五 子之歌	
昭和19年度	歴史	80	加藤鐵二郎	一、三国同盟の由来 二、文芸復興の意義 三、ローマ滅亡期に於ける軍事的事情		
	倫理	80	伊賀駒吉郎	一、日本国民ノ特色ヲ記せ		各科共通
	国語	80	上 原 延 蔵	一、のどやかなる夕月夜に海の上曇りな く見えわたれるも住み馴れ給ひし故郷の 池水に思ひまがへられ給ふにいはむ方な く恋しきこといづ方ともなく行方なき心 地し給ひてたゞ目の前に見やらるゝは淡 路島なりけりあはと遙かになど宣ひて あはとみる淡路の島のあはれさは残 る隈なく澄める夜の目	『源氏物 語』明石	
				二、謡曲「高砂」の主題に就いて説明せ よ	謡曲 世 阿弥『高 砂』	

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出典等	備考
昭和18年度	国語	80	細川 馨	一、全文を解釈せよ (上歌) 四條五條の橋の上老若男女貴賤 都鄙色めく花衣、袖を列ねて行く末の雲 かと見えて八重一重咲く九重の花盛り名 に負ふ春のけしきかな名に負ふ春のけし きかな (ロレギ) 河原おもてを過ぎ行 けば急ぐ心の程もなく車大路や六波羅の 地藏堂よと伏し拝む (シテ) 観音も同 座あり闍提救世の方便あらたにたらちね を守り給へや (地) げにや守りの末す ぐに頼む命は白玉の愛宕の寺もうち過ぎ ぬ六道の辻とかや (シテ) げに恐ろし やこの道は冥途に通ふなるものを心ばそ 鳥部山 (地) 煙の末も薄霞む声も旅雁 の横たはる (シテ) 北斗の星の曇りな き御法の花も開くなる経書堂はこれかと よ (地) そのたらちねを尋ねる子安 の塔を過ぎ行けば (シテ) 春の隙行 駒の道 (地) はや程もなくこれぞこの (シテ) 車宿り (地) 馬留めこゝより 花車おりの衣播磨濁須磨の徒歩道清 水の仏の御前に念誦して母の祈誦誓を申 さん	謡曲『熊 野』	
				二、謡曲に現れた女性に就いて略述せよ	謡曲	
	国語	80	小林 文助	一、左の文に仮名をつけ通釈すべし こゝに大国主命答へまをさく「唯僕が住 所をば、天つ神の御子の天津日繼知らし めさむ富足る天の御巢なして底津石根に 宮柱太知り、高天の原に氷木高知りて治 めたまへば僕は百足らず八十?手に隠り て待ひなむ、又僕が子ども百八十神は、 即ち八重事代主神、神の御尾前となりて 仕え奉らば違ふ神あらじ」と白しき 二、左の歌を訳せよ	『古事記』 上巻 葦 原中国の 平定 大 国主神の 国譲り	
				神風の 伊勢の海の 大石に 這ひもと ろふ 細蝶の い這ひもとほり 撃ちて しまむ	『古事記』 中巻 神 武天皇 東征	
				三、左の語に仮名を附し解釈すべし 1. 痛矢串 2. 天の石位 3. 思金神 4. 高御産巢日神	『古事記』	
	国語(文学史)	80	細川 馨	一、例を経国美談にとり政治小説の本質 を述べよ 二、次の事を説明せよ イ、新体詩抄 ロ、落合直文 ハ、正岡子規 ニ、小説神髓	矢野龍溪 『経国美 談』、政 治小説	
					近代詩 落合直文 正岡子規 坪内逍遙 『小説神 髓』	
	国語(文学概論)	80	新町 徳之	一、文学の発生を略述せよ 二、創作と批評との関係	文学 創作・批 判	
	国語(国語学)	80	新町 徳之	一、大東亜共栄圏域に於ける諸言語を略 述し、それら諸言語に於ける国語の地位 を論定せよ 二、本居宣長の国語法研究の価値	国語 本居宣長	

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和17年度	国語	80	小林 文 助	一、左の文中傍線の所に読仮名を附し、語釈を施し、且全文を通釈すべし 大国主神、出雲の国の多藝志の小濱に、天の御舎を造りて、水戸の神の孫櫛八玉神を膳夫として天の御宴を献る時に禱ぎ白して、櫛八玉神鵜に化りて海の底に入りて底の埴を咄ひ出でて、天の八十平瓮を作りて、海布の柄を鎌りて熨目に作り、海尊の柄を?杵に作りて、火を鑽り出でてまをしけらく「此の我が燐る火は、高天の原には神産巢日御祖の命の富足る天の新巢の凝烟の、八竿垂るまで焼き挙げ、地の下は底津石根に焼き凝して、栲縄の千尋縄打ち延べ釣らせる海人が、口大の尾翼鏝さわさわに控きよせ騰げて、折竹のとををををに天の眞魚作献らむ」とまをしき、	『古事記』 上巻 葦原中国の平定 大国主神の国譲り	
				二、天孫降臨に先ち遣されし神々の名を順次に記せ	『古事記』 上巻 邇邇去命天孫降臨	
	法制	80	後藤庄治郎	一、我国の法制上より見たる立法、司法及行政の意義如何 二、人身権を説明すべし		家政科共通
昭和18年度	倫理	80	伊賀駒吉郎	一、自然主義ノ眞・善・美ニツイテノ見方ヲ述ベ其ノ欠点ヲ指摘評論セヨ 二、我が立憲政治の大要を述べよ		各科共通
	法制	80	中森作太郎	二、左の各項に就いて述べよ イ、国体の淵源と憲法第一条 ロ、司法権の独立 ハ、緊急勅令		家政科共通
	倫理	80	伊賀駒吉郎	一、自然主義ノ要領ヲ述ベ且浪漫主義ト比較セヨ		各科共通
	国語	80	上 原 延 蔵	一、冬になりて雪ふりあれたる頃空の景色も殊にすぐく詠め給ひて琴を弾きすさび給ひてとめてあはれなる手を弾き給へるに異物の声どもはやめて涙をのごひあへり昔胡の国尔遣はしけむ女を思しやりてましていかなりけむこの世にわが思ひ聞ゆる人などをさやうに放ちやりたむ時など思ふもあらむ事のやうにゆゑしくて霜の後の夢と誦じ給ふ。	『源氏物語』須磨	
				二、この頃をさなき人の女房など尔時々読まするを立ち聞けば物よくいふ者の世にあんべきかな虚言をよしなれたる口つきよりぞいひ出たすらむと覚ゆれどさしもあらしやと宣へばけに偽り馴れたる人やさまざま尔きも酌み侍らむたゞいと誠のことこそ思ひ給へられけれどと硯をおしやり給へばこちなくも聞えおとしけるかな神代より世にあることを記し置きけるなんなり日本紀なとばたゞ片そばそかしこれらにことく道々しく委しき事はあらめとて笑ひ給ふ。	『源氏物語』蜆	
				一、解釈		
				二、評釈		

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和17年度	漢文	80	大江 文 城	一、返点送仮名並ニ解 宋人有関其苗之不長而堰之者、芒々然帰、 謂其家人曰、今日病矣、予助苗長矣、其 子趨而往視之、苗則槁矣、天下之不助苗 長者寡矣、天下之不助苗長者寡矣、以為 無益而舍之者、不耘苗者也、助之長者堰 苗者也、非徒無益、而又害之、 二、同上 今人飢、見長而不敢先食者、将有所讓也、 勞而不敢求息者、将有所代也、夫子之讓 乎父、弟之讓乎兄、子之代乎父、弟之代 乎兄、此二行者、皆反於性而悖於情也、 然而孝子之道、礼儀之文理也、	『孟子』 公孫丑章 句上	
	国語	80	細 川 馨	次の全文を解釈せよ (イ) 旅衣末はるばるの都路を、末はる ばるの都路を、今日思ひ立つ浦の波、船 路のどけき春風の、幾日来ぬらん跡末も、 いさ白雲の遙々と、さしも思ひし播磨瀉、 高砂の浦に着きにけり、 (ロ) われ見ても久しくなりぬ住吉の岸 の姫松幾代経ぬらん睦まじと君は知らず や瑞籬の久しき代々の神かぐら夜の鼓の 拍子をそろへてすゝめ給へ宮つこ達 (ハ) 神と君との道すぐけ都の春にゆく べくは 「されぞ還城楽の舞」 「さて萬歳の」 「小忌衣」 さす腕には悪魔を払い、をさむる手には 壽福を抱き千秋楽は民を撫で萬歳楽には 命を述ぶ、相生の松風、颯々の声ぞ楽し む、颯々の声ぞ楽しむ	謡曲 世 阿弥『高 砂』	
				一、万葉集解題を簡明に記述せよ 二、次の歌の評釈を記せ、傍線の個所を 文法上より説明せよ。 志貴親王薨時作歌一首并短歌 梓弓手に取り持ちますらをのさつ矢たば さみ立ち向ふ高岡山に春野焼く野火と見 るまで燎ゆる火を如何にと問へば玉鐙の 道来る人の泣く涙こさめに降れば白妙の 衣ひづちて立ち留り吾に語らく何しかも もとな言へる聞けば音のみし泣かゆ語れ ば心ぞ痛き天皇の神のみ子のいでましの たびの光ぞこだ照りたる 短歌二首 高圓の 野への秋萩 いたづらに 咲き か散るらむ 見る人なしに 御笠山 野べゆく道は こきだくも 鑿 く荒れたるか 久にあらなくに	『万葉集』	
	国語	80	山 口 助 治		『万葉集』 卷之二 挽歌 (230～232)	太字は二 重傍線部 分

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和16年度	国語	50	山口 助 治	一、謡曲概説 二、左の詩章を評釈せよ 高砂の尾上の鐘の音すなり、暁かけて霜 はおけども、松が枝の葉色は同じ深緑立 寄る陰の朝夕にかけども落葉の尽きせぬ は真なり、松の葉の散りうせずして色は なほ、正木の蔓長き世の喩なりける常磐 木の中にも名は高砂の末代の例にも相生 の松ぞめでたき	謡曲 謡曲 世 阿弥『高 砂』	
	倫理	80	伊賀駒吉郎	一、ストイック ノ 倫理説 二、クラシック ニ付テ		各科共通
昭和17年度	文学概論	80	新 町 徳 之	一、文学ノ本質 二、一作品ニ即シテ文芸批評ノ種々相ヲ 略述スベシ	文学 文芸批評	
	国語学	80	新 町 徳 之	一、国語母韻（ア・イ・ウ・エ・オ）の 音価ヲ説明スベシ 二、（イ）古代語ト近代語トノ比較的記 述 （ロ）東條義門ノ国語研究上ノ業績	母音 古代語・ 近代語 東條義門	
	文学史	80	細 川 馨	一、新体詩の発生に就いて略述せよ 二、短歌俳句の革新運動に於ける正岡子 規の立場に就いて略述せよ 三、小説神髓の文学史的価値に就いて述 べよ	新体詩 正岡子規 坪内逍遙 『小説神 髓』	
	国語	80	上 原 延 蔵	解釈 一、この頃をさなき人の女房などに時々 読まするを立ち聞けば物よくいふ者の世 にあるべきかな、虚言をよくよくしなれ たる口つきよりぞいひ出だすらむと覚ゆ れどさまざまにも涙み侍らむたゞいと誠 のこととこそ思ひ給へられけれ、とて硯 をおしやり給へば、こちなくも聞えおと してけるかな、神代より世にあることを 記し置きけるななり日本紀などはたゞ片 そばぞかしこれらにこそ道々しく委しき 事はあらめ、とて笑ひ給ふ、 二、よろづのこと昔には劣りざまに浅く なりゆく世の末なれど仮字のみなむ今の 世はいと際なくなりたるふるき跡は定ま れるやうにはあれどひろき心ゆたかなら ず一筋に通ひてなむありける、妙にをか しきことは外よりてこそ書きいづる人人 ありけれど女手を心に入れて習ひしかり にこともなき手本おほく集へたりし中 に中宮の母御息所の心にも入れず走り書 い給へりし一くだりばかりわざとならぬ を得て際ことに覚えしはや、	『源氏物 語』蛭 『源氏物 語』梅枝	
	西洋史	80	加藤鐵三郎	一、文芸復興の意義 二、左につきて記せ （イ）三国同盟 （ロ）ワシントン会議 （ハ）ヘレニズム		

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和16年度	国語	50	小林 文 助	一、左の文を通釈し且傍線の語を精解すべし かれこらに天津日子番能邇邇芸命に詔りたまひて天の石位を離れ、天の八重多那雲を押し分けて稜威の道別き道別きて天の浮橋に浮きじまり、そりたらして竺紫の日向の高千穂の靈振る峯に天降りまさしめたまひき、かれここに天忍日命天津久米命二人天の石叅を取り負ひ、頭椎の大刀を取り佩き天の波士弓を取り持ち天の真鹿兒矢を手挟み、御前に立たして仕へ奉りき	『古事記』 上巻 邇邇芸命 天孫降臨	
				二、倭建命につき知れることどもを記せ	『古事記』 中巻	
	国語	50	細 川 馨	一、全文解釈せよ 四百四病は世に名医ありて験氣を得たることかならずなり、人は智恵才覚にもよらず貧病のくるしみ、是をなせる療治のありやと家有徳なるかたに尋ねければ今までそれをしらず養生ざかりを四十の陰までうかうか暮されしし事よ少し見立おってけれ共いまだよい所あるは草足袋に雪駄を常住帯かる心からは分限にもなり給はん長者丸といへる妙薬の方組伝へ申すべし、朝起五両家職二十両夜詰八両始末十両達者七両此五十両を細にして胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入れ是を朝夕吞込むからは長者にならざるといふことなし	井原西鶴 『日本永代蔵』煎じやう常とはかはる問薬	
				二、日本永代蔵に描かれたる世界に就いて説明せよ	井原西鶴 『日本永代蔵』	
	漢文	50	大江 文 城	一、左ノ文ノ解 直木不待樂栝而直者、其性直也、枸木必得待樂栝丞矯、然後直者、以其性不直也、今人之性惡、必得待聖主之治、礼儀之化、然後皆出於治合於善也、	『荀子』 性惡篇 第二十三	
				二、左ノ文ニ返点送仮名ヲツケヨ 貴人有過端、而説有明言礼儀以桃其惡、如此者身危也、貴人或得計、而欲身以為功、説者與知者、如此者身危、強以其所不能為、止以其所不能已、如此者身危、	『韓非子』 説難篇 第十二	
	漢文	50	大江 文 城	一、左ノ文ニ返点送仮名ヲツケ且解釈セヨ 三十幅共一轂、当其無有車之用、埏埴以為器、当其無有器之用、鑿戶牖以為室、当其無有室之用、故有之以為利、無之以為用、	『老子』 第十一章	
				二、孔老二家ノ「道」ニ対スル見解ノ相異	孔子・老子	
	東洋史	50	加藤鐵三郎	一、清談につきて記せ 二、拔都の西征につきて記せ		
	法制	50	後藤庄治郎	一、我民法ニ於ケル無能力者ヲ説明スベシ 二、内縁關係ノ存立スル事情及之ノ対スル心構ヘ如何		家政科共通

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和15年	漢文	80	大江文城	一、左ノ文ノ句読点、返点、送仮名並ニ解 凡説之難非吾知之有以説之之難也又非吾弁之能明吾意之難也又非吾敢横失而能尽之難也	『韓非子』 説難篇第十二	
				二、左ノ文ノ句読点、返点、送仮名並ニ解 今之人化師法積文学道道礼儀者為君子縦性情安恣睢而違礼儀者為小人用此觀之然則人之性惡明矣其善者偽也	『荀子』 性惡篇第二十三	
				三、孟荀性説ノ一斑	孟子・荀子	
	漢文	80	大江文城	一、左ノ文ニ句読、返点、送仮名ヲツケ且ツ旁線ノ所ヲ解釈セヨ 三十幅共一轂、当其無有車之用、埴埴以為器、当其無有器之用、鑿戶牖以為室、当其無有室之用、故有之以為利、無之以為用、	『老子』 第十一章	
				二、左ノ文ニ句読、返点、送仮名ヲツケ且ツ旁線ノ所ヲ解釈セヨ 彼節者有間、而刀刃者无厚、以无厚入有間、恢々乎其於遊刃必有余地矣、是以十九年而刀若新発於硯	『莊子』 内篇 養生主篇第三の二	
				三、孔老二家ノ思想ノ相違点	孔子・老子	
昭和16年度	倫理	50	伊賀駒吉郎	一、自然主義ニ付テ左ノ要項ヲ述ベヨ (一) 自然主義ト浪漫主義トノ比較 (二) 自然主義ノ真、善、美ニ付テノ観方及ビ之ニ対スル批評		各科共通
	国語学	50	新町徳之	一、世界ノ言語ニ於ケル日本語ノ地位ヲ略述セヨ 二、左問ノ一ツニ答ヘヨ (イ) 近古語(鎌倉室町時代語)ノ特質 (ロ) 本居宣長ノ国語研究上ノ事蹟 以上	鎌倉室町時代語 本居宣長	
				一、音位律トハ何ゾ 二、悲劇ヲ概説セヨ	音位律 悲劇	
	文学概論	50	新町徳之	一、尾崎紅葉の写実性に就いて述べよ 二、幸田露伴の代表的作品一、二を選び其の作風の特異性に就いて説明せよ	尾崎紅葉 幸田露伴	
	文学史	50	細川馨	一、聞し召さむには何の憚かは侍らむ御前に召しても商人の中にてだにこそふるごと聞きはやす人は侍りけれ琵琶なくまことの音を弾きしづむる人いにしへも難う侍りしををさをさ滞ることなら懐かしき手など筋ことになむいかでたどるにか侍らむ荒さ浪の声にまじるは悲しう思ひ給へられながらかきつむる物歎かしき紛らる折も侍り	『源氏物語』明石	
	国語	50	上原延蔵	解釈並に批評をもなせ 二、親たちはこゝらの年頃の祈の叶ふべき事と思ひながら、ゆくりかに見せ奉りて思し数まへざらむ時いかなる歎をかせむと思ひやるにゆゝしくて、めでたき人と聞ゆともつらういみじうもあるべきを目に見えぬ御神を頼み奉りて人の御心をも宿世をも知らでなとうち返し思ひ乱れ居たり	『源氏物語』明石	

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和15年	国語	80	山 口 助 治	二、万葉集巻五、巻九、巻十六について概説せよ	『万葉集』巻五・九・十六	
	国語	80	小 林 文 助	一、通釈 世上に金銀の取遣には預り手形に請判、慥に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、その約束を延ばし、出入になる事なりしに、空定めなき雲を印の契約をたがへず、その日切に損徳をかまはず売買せしは扶桑第一の大商人の心も大腹中にしえそれ程の世をわたるなる、難波橋より西見渡しの百景、数千軒の間丸、薔ならべて、白土雪の曙をふうばふ、杉ばへの俵物山もさながら動きて、人馬に付け送れば大道轟き地雷のごとし、上荷茶船かぎりもなく川浪に浮びしは、秋の柳にことならず、米さしの先を争ひ、若い者の勢ひ虎臥す竹の林と見え、大帳雪を翻へし十露盤丸雪をはしらせ、天秤二六時中の鐘にひゞきまattering、其家の風暖簾吹きかへしぬ 二、みつぐし久米の子等が粟生には韭一茎、其根が茎、其根芽つなげて撃ちてしやまむ	井原西鶴『日本永代蔵』二代目に破る扇の風	
	文学概論	80	新 町 徳 之	一、文芸と道徳との関係 二、左問ノーツヲ選ビテ答ヘヨ イ、文学概論ノ体系 ロ、鑑賞批評		
	国語学	80	新 町 徳 之	一、国語ノアクセントヲ略説セヨ 二、新井白石・本居宣長ノ国語研究上ノ事蹟ヲ略説スベシ	新井白石・本居宣長 謡曲・狂言	
	国語	80	細 川 馨	一、謡曲と狂言との本質を比較せよ 二、解釈せよ まづ冬木より咲きそむる窓の梅の北面は雪封じて寒きにも異木よりまづ先だてば梅を切りやそむべき、見じといふ人こそ憂けれ山里の折りかけ垣の梅をだに情なしと惜しみに今更薪になすべしとかねて思ひきや、桜と見れば春ごとに花少し遅ければこの木やわぶると心を尽し育てしに今はわれのみわびて住む家桜切りくべて緋桜になすぞ悲しき、さて松はさしもげに枝をため葉をすかしてからあれと植ゑ置きしその甲斐今は嵐吹く松はもとより常磐にて薪となるは梅桜切りくべて今ぞ御垣守衛士の焚く火はおためなりよくよりてあたり給へや	謡曲『鉢木』	
	文学史	80	細 川 馨	一、明治文学に於ける正岡子規の立場に就いて略述せよ 二、轡牛は何故日蓮に帰依するに至りしか 三、露伴の作品の特質如何	正岡子規 高山樗牛 幸田露伴	
	西洋史	80	加藤鐵三郎	一、文芸復興の意義 二、三国同盟と二国同盟の成立 三、国際連盟後に於ける国際協調主義につき記せ		

表 樟蔭女子専門学校国文科「国語」検定試験問題
(昭和15(1940)年度～昭和19(1944)年度)

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和15年	倫理	80	伊賀駒吉郎	一、グラシック、ローマンチック及ナチュラリズムノ性質ニ付テ記セ		各科共通
	法制	80	後藤庄治郎	一、衆議院ノ停会及解散ニ就イテ述ベヨ 二、家督相続ト遺産相続トノ異ナル点ヲ列挙セヨ		
	国語	80	上原延蔵	解釈 一、かく怖づる人をばけしからず放俗なりとて眉黒にてなむ睨み給ひけるにいとゞ心地など惑ひける親たちはいと怪しく様異におはするこそ思しけれども、思し取りたる事ぞあらむや怪しき事ぞと思ひて聞ゆる事は深くさいらへ給へば、いとぞかしこきやとこれをもちと恥ずかしと思したりさはありとも音聞きあやしや人は、みめをかしき事をこそ好むなれ、むくつけむなる鳥毛虫を興ずなると世の人の聞かむもいと怪しと聞え給ふ 二、中納言さこそ心に入らぬ気色なりしかどその日になりてえも言はぬ根ども引具して参り給へり、小宰相の局に先づおはして心幼く取り寄せ給ひしが心苦しきに若々しき心地すれど浅香の沼を尋ねて侍り、さりとともまけ給はじとあるぞ頼もしき何時の間に思ひよりける事にか言ひ過すべくもあらず、右おの少将おはしたるなり 三、何れともいかにわくべき菖蒲草 同 じ淀野に生ふる根なれば	『堤中納言物語』 虫めづる 姫君	
					『堤中納言物語』 逢坂越えぬ 権中納言	
					『堤中納言物語』 逢坂越えぬ 権中納言	
	国語	80	山口助治	評釈 一、うつせみとおもひしときにたづさへて、わがふたちみしはしりでのつゝみにたてつきの木のこちごちのえのはるのはのしげきがごとくおもへりしいもにはあれど、たのめりしこらにはあれどよのなかを、そむきしえねばかぎろひのもゆるあらぬにしるたへのあまひれが、くりとりじものあさだちいましていりひなす、かくれにしかばわきもこがかたみにおけるみどりこのこひなくごとに、とりあたふものしなれば、をとこじものわきばさきもちわきもことふたり、わがねしまくらつくまやまのうちにひるはもうらさびぐらし、よるはもいきづきあかしなげけどもせむすべしに、こふれどもあふよしをなみおほとりののがひのやまに、わがこふるいもはいますとひとのいへばいはぬさくみてなづみこしけくもぞ、なきうつせみとおもひしいもがたまかぎるほのかにだにもみへぬおもへばこぞみてしあきのつくよはてらせれど、あひみしいもはいやとしさかる、ふすまぢをひきてのやまにいもをおきてやまぢをゆけばいけりともなし	『万葉集』 巻二 相聞 柿本人麻呂	

